

『浮世の画家』における抹消された天皇

The Suppressed Emperor in *An Artist of the Floating World*

倉 田 賢 一

要 旨

『浮世の画家』の邦訳者によれば、翻訳にさいしてカズオ・イシグロは、作中の「大正天皇の銅像」を「山口市長の銅像」に訂正した。この天皇の抹消は、その場面が持つ意義から、主人公の「戦争責任」をめぐる思考における、天皇の無視を反復するものとして見ることができる。「戦争責任」をめぐる言説における天皇の位置と、この作品で「浮世」（あるいは「浮遊する世界」）と呼ばれているものが、主人公の疑心暗鬼をかきたてるホンネとタテマエの使い分けにはかならないことを考えあわせると、この天皇の抹消は重層的に決定されていることがわかる。すなわち、主人公がおそれる左翼の文脈では、天皇が「浮遊する世界」に関連しているが、彼がかつて属した右翼の文脈では、天皇はむしろ「浮遊する世界」の克服に関連している。さらに、この両者を同時に抑圧する天皇の無視は、昭和天皇に帰せられる空虚な自己批判の身振りの反復によってなされるのである。

キーワード

カズオ・イシグロ、『浮世の画家』、戦争責任、天皇

飛田茂雄は『浮世の画家』の「訳者あとがき」で、次のように記している。

大きな訂正として、原文に「大正天皇の銅像」とあったのを、「山口市長の銅像」とした箇所があるが、それは（たぶんご両親の忠告によって）イシグロ自身が私に訂正を要求したものである¹⁾。

この作品がいわゆる「戦争責任」²⁾を扱っていることを考えると、これは見過ごせない「訂正」であり、その意義については次のような論評がある。

The effect of this change is significant: it transforms the historical context of the Takami garden from a space associated with imperial commemoration to the memorial site of a former mayor with an uncertain political career. More importantly, the change effaces the novel's potential direct address to Japan's role in and responsibility for World War II: a statue of Taisho would, for Japanese readers, have a controversial resonance similar to that of the Yasukuni shrine in Tokyo, a memorial to those who died in war and also, for many, a monument to militarism and Japanese imperialism.³⁾

もっとも、「大正天皇の銅像」に靖国神社のような意味合いがあるとするのは、行き過ぎであろう。むしろ、比較的平和な時代の天皇というのが、大正天皇の一般的なイメージだと思われる。それでもやはり、ここで天皇の存在が抹消されていることは注目に値する。

おそらくイシグロの両親がおかしいと感じたのは、天皇の銅像が公園に立っていることが、大正期から終戦にかけての常識にそぐわないからである⁴⁾。御真影は奉安殿におさめられるべきものであり、失火で焼いてしまった校長が自殺したことさえある。同じく天皇の似姿である銅像が公園で雨ざらしにされ、そのまわりに（おそらく天皇に尻を向けるかたちで）ベンチが設けられていることは⁵⁾、したがって不自然である。

ここで注目したいのは、オノの「戦争責任」をめぐる思考において、天皇の存在が無視されているように見えることである。すなわち、イシグロ

による「大正天皇の銅像」の抹消は、オノによる天皇の無視を反復するものではないだろうか。イシグロは、「大正天皇の銅像」が不自然であることを知らなかったように、右翼にとっての天皇の意義についてたんに知らなかったのだろうか。しかしオノは、「ミギ・ヒダリ」の推薦文で仲間たちの天皇への忠誠に触れており⁶⁾、彼に影響を与えたマツダも、天皇親政の実現を主張している⁷⁾。それによって、彼が肝心の「戦争責任」を語るさいに天皇に触れないことが、いっそう際立つのである。

「大正天皇の銅像」の下でオノがセツコと話しているのは、作曲家のナグチについてであるが、彼の自殺についてオノはイチローにこう説明する。

And after the war, Mr Naguchi thought his songs had been – well – a sort of mistake. He thought of all the people who had been killed, all the boys your age, Ichiro, who no longer had parents, he thought of all these things and he thought perhaps his songs were a mistake. And he felt he should apologize. To everyone who was left. To little boys who no longer had parents. And to parents who had lost little boys like you. To all these people, he wanted to say sorry. I think that's why he killed himself.⁸⁾

これは子供に向けた説明ではあるが、ミヤケが語ったとオノが記憶するところによれば、ミヤケの社長の自殺も an apology on behalf of us all to the families of those killed in the war⁹⁾であったとされており、見合いの場での自己批判においても、人民の苦しみが言及されているだけである¹⁰⁾。もちろん、このような論理で戦後に自殺した右翼はまれであろう。右翼による自殺は、人民の被害に対する責任をとってではなく、天皇に対する敗戦の責任をとってなされた。しかしイシグロがこの点について理解してい

なかったのであっても、次に見るように、テキストが語る「浮遊する世界」の論理を介して、「戦争責任」と天皇は論理的に相関しており、天皇の無視は問題として残る。

そもそも「戦争責任」の問題はその究極において、ほかならぬ天皇の「戦争責任」をめぐるものだと言える。国内法的には天皇は無答責であるにもかかわらず、昭和天皇はマッカーサーとの会談で「戦争責任」を自ら認め¹¹⁾、結果的に極東国際軍事裁判で「戦争責任」を問われなかった。そして左翼ないし「戦後民主主義」の文脈では、天皇の「戦争責任」のあいまいさが「天皇制」に内在する問題として語られてきた。代表的なものとして、丸山眞男は「天皇制における無責任の体系」を次のように論じている。

明治憲法において「殆ど他の諸国の憲法には類例を見ない」大権中心主義（美濃部達吉の言葉）や皇室自律主義をとりながら、というよりも、まさにそれ故に、元老・重臣など超憲法的存在の媒介によらないでは国家意思が一元化されないような体制がつけられたことも、決断主体（責任の帰属）を明確化することを避け、「もちつもたれつ」の曖昧な行為連関（神輿担ぎに象徴される！）を好む行動様式が冥々に作用している。「輔弼」とはつまるところ、統治の唯一の正当性の源泉である天皇の意思を推しはかると同時に天皇への助言を通じてその意思に具体的内容を与えることにほかならない。さきへのべた〔臣民の〕無限責任のきびしい倫理は、このメカニズムにおいては巨大な無責任への転落の可能性をつねに内包している¹²⁾。

丸山はこのような「神輿担ぎ」的な相互主観的決定のありかたが、日本がなしくずしに戦争へ突入したことの元凶だとした¹³⁾。思うに、この相互主観性はホンネとタテマエの問題として理解できる¹⁴⁾。日本人はホンネと

タテマエを使い分け、タテマエのレベルでは相手にあわせようとするため、日本の組織では責任ある決定が行われず、浮動的なタテマエの集積である「空気」に流されてしまう。このような現象を典型的に示すものが、丸山によれば天皇の輔弼だったということになる。他方で、マツダのような右翼にとっては、そうした無責任な「元老・重臣」を排除することで、「無限責任のきびしい倫理」に基づいた天皇親政を実現すべきであり、この無責任性は天皇に内在する問題ではないということになる。つまり、天皇の存在は立場によって、相互主観性とその打破のいずれをも体現しうる。

そして『浮世の画家』において問われているのは、このような相互主観性をいかにして打破するかということである。そもそも、オノが父を去り、タケダを去り、モリヤマを去ったのは、彼が主体的であろうとしていたからであり、それを彼は *the ability to think and judge for myself, even if it meant going against the sway of those around me*¹⁵⁾ と表現している。つまり、相互主観的な「空気」に流されない「一人称」を確保することである¹⁶⁾。彼は前述のようなマツダの論理によって、モリヤマの「浮遊する世界 (floating world)」と決別するが、この「浮遊する世界」において浮遊しているものは、ホンネにピン止めされないタテマエだと解することができる。モリヤマにとっての「浮遊する世界」とは直接的には歓楽街のことだが、それは移ろいゆく無常の世界であるだけでなく、嘘と誠（商売女の、客に対するタテマエとホンネ）の世界でもあることが、モリヤマ自身の次の発言で示されている。

Gisaburo is an unhappy man. [. . .] But then sometimes we used to drink and enjoy ourselves with the women of the pleasure quarters, and Gisaburo would become happy. Those women would tell him all

the things he wanted to hear, and for the night anyway, he'd be able to believe them. Once the morning came, of course, he was too intelligent a man to go on believing such things. But Gisaburo didn't value those nights any the less for that. The best things, he always used to say, are put together of a night and vanish with the morning. What people call the floating world, Ono, was a world Gisaburo knew how to value.¹⁷⁾

しかしモリヤマの「浮遊する世界」と決別したはずのオノが、いまや別のかたちで、浮遊するタテマエによって脅かされている。彼の周囲によるホンネとタテマエの使い分けが、彼を疑心暗鬼にしているのである。特に娘のセツコは多くの場面で、それに反するホンネが存在することを態度で示しながら、タテマエではオノの言うことに合わせている。セツコはそうにして、ノリコの破談の「本当の理由」¹⁸⁾、すなわち相手方のホンネについての不安をかきたて、オノに興信所への対策をうながす¹⁹⁾。これがミヤケとの会話の想起をとおして²⁰⁾、戦争責任をめぐる自己イメージについての不安へと収斂していく。

「浮遊する世界」はいわばお互いを子供扱いする世界であり、オノも娘たちによってイチローと同じように扱われているとも言える。それは保護と免罪を与えるが、潜在性としての現実に対する不安をも生む。イチローが大人の世界から守られている反面、怪獣や飲酒を内心では恐れているように、オノの戦争責任についての不安も、この保護と免罪によって生じたものである。

オノはいわゆる「信頼できない語り手」だが、読者にとって彼が信頼できないことは、このように決して彼だけの「責任」ではない。オノをとりまく浮遊するタテマエの集積が、彼の自己イメージを攪乱するのであり、その意味では彼のまわりのすべての人が「信頼できない語り手」である。

この作品は、信頼できる語り手と信頼できない語り手があるのではなく、語り手はそもそも信頼できないことを教えている。自己イメージは相互主観的であり、したがって浮動的であることを、「浮遊する世界」は明らかにするのである。

いまやオノにとってこの「浮遊する世界」に対抗するものは、見合いの場での無内容な自己批判の身振りでしかない。しかしこの「一人称」の叫びによって²¹⁾、オノは最小限の主体性を確保するとともに、それまでタテマエに終始していた雰囲気は緩み、「浮遊」していた縁談が成功するのだから²²⁾、それは目的を達しているのだとも言える。ここにおいて、天皇の無視は重層的に決定されたものである。前述のように、(オノが脅かされていると感じる、ミツオの視線に代表される²³⁾)左翼の文脈からは、天皇が「浮遊する世界」を体現することになる。それによって同時に弾劾されているのが、「浮遊する世界」の打破としての天皇という考えである。さらに、存在するかどうかがあいまいな「戦争責任」を、自ら認めることで免れようとする身振りは、それ自体が(右翼としては不遜であり、またある意味では忠実なことに)昭和天皇を反復するものである。天皇の無視は、これらの事情を一挙に抑圧する。それはあるいは、「浮遊する世界」としての戦後体制を規定する抑圧だと言ってよいのかもしれない²⁴⁾。

テキストは、作家が置かれた歴史的現実から自由ではありえない。1960年代の、外国人がほとんどいないサリー州に放り込まれた五歳のイシグロは、自分では読めない文字で「戦争責任」と顔面に大書されたまま、歩き回っていたようなものだったはずである。このテキストにおける、保護されていることの反面としての自己イメージをめぐる不安は、歴史的現実には確固として根ざしたもののなのである。そうであるとすれば、それと論理的に相関する天皇の抹消もまた、歴史的現実はその反復の基礎を持つものだとと言えるはずである。

注

- 1) カズオ・イシグロ『浮世の画家』飛田茂雄訳、ハヤカワepi文庫、2006年、310ページ。
- 2) 本稿では、特定の政治的立場を含意する用語にはカッコを付し、また天皇に対する敬語等も用いない。
- 3) Motoyuki Shibata and Motoko Sugano, 'Strange Reads' in eds. Sean Matthews and Sebastian Groes, *Kazuo Ishiguro* (Continuum, 2009), p. 29.
- 4) 実際には、天皇の銅像（主に神武天皇像と明治天皇像）は日本各地に存在するが、そのいくつかを調べたかぎりでは、屋外に置かれているのは明治期と戦後のものであり、他方で昭和4年のものである茨城県東茨城郡大洗町磯浜町「幕末と明治の博物館」の明治天皇像は、「聖像殿」におさめられている。
- 5) Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World* (Faber and Faber, 1986), pp. 134-5.
- 6) *Ibid*, p. 64.
- 7) *Ibid*, pp. 173-4.
- 8) *Ibid*, p. 155.
- 9) *Ibid*, p. 55.
- 10) 'I accept that much of what I did was ultimately harmful to our nation, that mine was part of an influence that resulted in untold suffering for our own people.' (*Ibid*, p. 123)
- 11) この真偽については争いがある。豊下楯彦『昭和天皇・マッカーサー会見』岩波書店、2008年、1-37ページ、および『歴史の真実と天皇制』日本共産党中央委員会出版局、1989年、247-257ページを参照。しかしこれが広く事実として受け止められてきたことには変わりはない。
- 12) 丸山眞男『日本の思想』岩波新書、1961年、38-39ページ。
- 13) 丸山眞男「日本支配層の戦争責任」（『丸山眞男集 別巻』岩波書店、1997年）、8ページを参照。
- 14) 日本人におけるホンネとタテマエについての代表的な議論として、土居健郎『表と裏』弘文堂、昭和60年、25-42ページを参照。
- 15) Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World*, p. 69.
- 16) 森有正は、一人称と二人称の「二項関係」から独立した真の一人称が、日本のコミュニケーションにおいて成立することは難しいとしている（森有正「経験と思想」、『森有正全集 第12巻』筑摩書房、1979年、87ページ）。
- 17) Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World*, pp. 149-50.

- 18) つぎのオノとノリコのやりとりを参照。‘[...] They felt the young man was inadequately placed to be worthy of you.’ / ‘But you know that was just formality, Father. We never found out the real reason. At least, I never got to hear about it.’ (*Ibid*, p. 52) ここでは先方のタテマエ (formality) についてのノリコの疑心暗鬼が、オノの疑心暗鬼を招いている。
- 19) *Ibid*, pp. 49, 85. これは末尾でセツコが否定していること (*Ibid*, pp. 191-3) から、オノの誤記憶と考えることもできるが、ワイ=チュウ・シムが可能性として提示するリアリズム的解釈 (①娘たちはオノの自殺を防ごうとしている②「逆コース」による事情変更) を採りたい (Wai-chew Sim, *Kazuo Ishiguro* (Routledge, 2010), pp. 42-3)。特に①は、セツコのタテマエによるオノの保護と整合する。
- 20) Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World*, pp. 55-6.
- 21) 佐々木孝次は、前注16の森有正の議論を受けて、ホンネとタテマエによるイメージ的な「二項関係」に対する抗議が「往々にして意味を諦めた、叫びとして聞きとられる」としている (佐々木孝次『甦るフロイト思想』講談社現代新書、昭和62年、161、179ページ)。
- 22) Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World*, p. 124.
- 23) *Ibid*, p. 117.
- 24) 白井聡『永続敗戦論』(太田出版、2013年)の第三章「戦後の『国体』としての永続敗戦」の論旨は、戦後体制とは天皇を抹消した(丸山が批判する「無責任の体系」としての)「国体」であった、としてまとめられるだろう。「天皇抜き」の国体とは、スラヴォイ・ジジェクの言う「カフェイン抜き・砂糖抜きのコーラ」(Slavoj Žižek, *The Fragile Absolute* (Verso, 2000), pp. 22-3を参照) のようであるが、オノの無内容な自己批判もまた、「自己批判抜きの自己批判」だとも言え、その上に戦後体制が可能になったのである。

